

法界 13 化土往生

聖人が正信偈に「専雜執心判淺深 報化二土正弁立」と仰せられたように、雜行を修する雜修の行者は自力の淺心だから化土の往生を得、正行を専修する行者は他力の深心だから報土往生を得るので、原因が違えば結果は当然違うのである。同じ念佛に向いながら 第十九願の行人は万行隨一の念佛と見、第二十願の信者は万行超過の念佛と見、第十八願に帰入した行者は自然法爾の念佛と見る。然るに真宗では 他力の念佛と聞けば既に他力不思議を諦得したように自惚れ、他力の御廻向と聞けば既に自力の機執を離れたように自惚れ、信後の真似をして、死後を楽しんでいる者が多いため、それでは他力を向こうに眺めて各自各様に領解している、自心建立の心にすぎないのだから、報土往生は絶対に出来ない。

同色に染めようと思つても、絹、木綿、羽一重、縮緬、モス、メリンス、毛物と品物が違つ

たら色の上りはみな違うように、同じ他力の名号に向つていながらも、智、愚、賢、聖、貧、富、男女、老幼の機每では、その結果は千差万別である。雑行雑修自力の心が千態万様であるから、修する人々の善惡によつて果報は悉く異なるのである。「良に仮の仮土の業因千差なれば、土も復応に千差なるべし」人間という共業は平等であつても、貧富、賢愚、美醜、強弱、寿命の長短、一人として平等でないのは不共業の然らしめる処である。平等の証果をうるには平等の信念でなければならない。八万の法藏を詮じつめた逆謗の一機が一体になつた一念の関所を突破され、開発され、攝取された時でなければ一味平等の報土往生とはならない。その境地に至る事は極難信であり、人中の分陀利華である。

だから、聖人は化土卷に「然るに濁世の群崩、穢惡の含識、乃し九十五種の邪道を出でて、半滿權実の法門に入ると雖も、真なる者は甚だ以て難く、実なる者は甚だ以て稀なり。疑なる者は甚だ以て多く、虚なる者は甚だ以て滋し」と仰せられたように、信仰の徹底した者は

殆どいないのだ。一本差した武士は無数にいて、極意を究めた荒木又右衛門のようなもの
は滅多にないのだ。頭を丸めた坊主は沢山いても親鸞や日蓮のような傑出した者は至極稀
である。

伝教が叡山を開いて修行を教えた聖道門の中で、根気の拙いものは念佛に入れと万行
隨一の念佛を教え、横川の源信和尚の往生要集によつて念佛の道が開かれ、吉水の法然
上人の選択集によつて大成されて万行超過の念佛となり、親鸞の信心為本によつて、
名号は自然法爾の念佛となつて輝いてゐるのだが、真なる者は甚だ以て難く、実なる者は甚
だ以て稀なりであるから、蟹が甲羅に応じた穴を掘るよう、その人その人の進んだ結果が
現れるのだから、各人各様の化土に往生するのだ。

真宗では化土往生を語る者は殆どない。化土往生は自力の善人の往生する処で、我々の
ような疑心の悪人の行かれる処でないから、自分達は他力で報土往生させて頂くのだと簡単

に片付けてはいないだろうか。それは誤算も甚だしいぞ。

弥陀の真意も釈尊の教説も方便から真実に趣入さすのが目的ではないか。方便の者が少なく、真実の者が数が多いと言えば顛倒の言葉である。小学校卒業は多く大学院卒業は少なく、兵兎担ぎは多く、横綱は少ない。俳優はざらにいるが、スターは稀である。農家は無数に有るが、篤農家は殆どいない。信者は数多く妙好人は雨夜の星だ。十九・二十に停滞する者が殆どで第十八願に趣入する者は殆どない。三百八十余人の僧侶でさえも、信の座に就く者は、御一人を除いてはわずかに三人だ。それに浄土真宗に流れを汲む者は、皆第十八願の行者と見るは、早計も甚だしいを通り越して無茶だ。

和讃に

報の淨土の往生は

おほからずとぞあらわせる

化土にうまるる衆生は すくなからずとおしえたり

報土の信者はおおからず 化土の行者はかずおおし

自力の菩提かなわねば 久遠劫より流転せり

と、聖人のお言葉を何と見るだろうか。繰り返して読む。報の淨土の往生は、おほかからずと

あらわせる。化土にうまるる衆生は、すくなからずとおしえたり。報土の信者はおおからず、化土の行者はかずおおし。結果から報土の往生が少なくて、化土の往生の数が多いと教えられたのは、原因から言えば専修の者は少なく、合点して他力の真似をしている自心建立の行者が多いと言う事ではないか。

他力の真似をしているのは易いが、他力不思議を体験する事は、甚難中の難事である。

機執が淨尽されて仏凡一体の境地に立てば、これ程易い他力不思議の世界はない。素人は数が多く玄人の数が少ないのは当然ではないか。色もなれば形もない十方法界に漲る如來の大慈悲を、色もなれば形もない極惡最下の劣機が諦得さして頂く事は、至難中の至難である。

そんなに難しかつたら凡夫に出来ないと言われるかもしだれないが、凡夫に出来ない事は教えてない。弥陀は三願を以て指導し、釈尊は三経に開説して、邪見憍慢の自惚れの自力を漸次調整し趣入せしむるが、果遂の誓いの願功である。極致を究める者は至つて少なく、一体になる者は至つて稀であり、他力の真似をする者は至つて多く、他力の贋物は至つて滋しだ。

信受本願前念命終、即得往生後念即生の心命終の即得往生の極意を諦得された報土往生の行人は殆どいなくて、その境地に到達し得ない人は皆、雜行雜修、自力の心の自分

の原因に応じた化土の宿を取りて千差万別の果報を得るのだ。

典拠を出せば

一、大經 爾時、慈氏菩薩、仏に白して言さく、世尊、何の因、何の縁ぞ、彼の國の人民胎生なる。仏、慈氏に告げたまわく、若し衆生ありて、疑惑の心を以て諸の功德を修し、彼の國に生れんと願じ、仏智、不思議智、不可称智、大乘広智、無等無倫最上勝智を了ぜず。

此の諸智に於いて疑惑して信ぜず。然れども猶罪福を信じ、善本を修習し、其國に生れんと願ぜん。此の諸の衆生、彼の宮殿に生じ、寿五百歳、常に仏を見ず、経法を聞かず、菩薩声聞聖聚を見ず、是の故に彼の國土に於いて之を胎生と言う。

二、觀經 一念のあひだの如くに、即ち極樂世界に往生することを得、蓮華の中に於いて

十二大劫に満ち蓮華まさに開く。

三、易行品 若し人、善根を種えて、疑えばすなはち華開けず。信心清淨なれば、華開きてすなはち仏を見たてまつる。

四、法事讚 極樂は無為涅槃の界なり。隨縁の雜善おそらくは生じがたし。

五、礼讚 若し専を捨てて雜業を修せんとするものは、百に時に希に一二を得、千に時に希に三五を得。乃至余、このごろみづから諸方の道俗を見聞するに、解行不同にして専雜異なることあり。ただ意をもつぱらにしてなせば、十はすなはち十ながら生ず。雜を修して至心ならざれば、千がなかに一もなし。この二行の得失、前にすでに弁ぜるがごとし。

六、往生要集 雜修のものは執心不牢の人とす。ゆえに懈慢國に生ず。もし雜修せずして、もつぱらこの業を行ぜば、これすなはち執心牢固にしてさだめて極樂國に生ぜん。乃至また報の淨土に生ずるものはきはめて少なし。化の淨土のなかに生ずるものは少なから

す。

七、正信偈

専雜執心判淺深 報化二土正弁立

八、真仏土卷

それ報を案すれば、如來の願海によりて果成の土を酬報せり。ゆえに報とい

うなり。しかるに願海について真あり仮あり。ここをもつてまた仏土について真あり仮あり。選択本願の正因によりて真仏土を成就せあり。乃至 すれどもつて真仮みなこれ大悲の願海に酬報せり。ゆえに知んぬ、報仏土なりということを。まことに仮の仏土の業因千差なれば、土もまた千差なるべし。これを方便化身・化土と名づく。真仮を知らざるによりて、如來広大の恩徳を迷失す。

九、化土卷

至心發願の願、邪定聚の機、双樹林下往生、無量壽仏觀經の意なり。

至心回向の願、不定聚の機、難思往生、阿弥陀經の意なり。

つつしんで化身土を顯さば、仏は『無量壽仏觀經』の説の如し、真身觀の仏これなり。土は『觀經』の淨土これなり。また『菩薩処胎經』等の説のごとし、すなはち懈慢界これなり。また『大無量壽經』の説のごとし、すなはち疑城胎宮これなり。

十、化土卷 二十願なり。機について定あり散あり。往生とはこれ難思往生是なり。仏とは即ち化身なり。土とは即ち疑城胎宮是なり。

十一、愚禿鈔 ひそかに『觀經』の三心往生を案すれば、これすなはち諸機自力各別の三心なり。『大經』の三信に歸せしめんがためなり、諸機を勸誘して三信に通入せしめんと欲ふなり。三信とは、これすなはち金剛の真心、不可思議の信心海なり。また「即往生」とは、これすなはち難思議往生、真の報土なり。「便往生」とは、すなはちこれ諸機各別の業因果成の土なり、胎宮・辺地・懈慢界・双樹林下往生なり、また難思往生なりと、知るべし。

十二、三經往生文類、觀經往生といふは、

十三、三經往生文類、弥陀經往生といふは、

十四、和讃、誓願不思議をうたがいて

御名を称する往生は

宮殿のうちに五百歳

むなしくすぐとぞときたまふ

報の淨土の往生は

おほかからずとぞあらわせる

化土にうまるる衆生をば

すかなからずとおしえたり

報土の信者はおほかからず

化土の行者はかずおほし

自力の菩提かなはねば

久遠劫より流転せり

不^{ふり}了^{りょう}仏^{ぶつ}智^ちのしるしには

如^{によ}來^{らい}の諸^{しよ}智^ちを^を疑^ぎ惑^{わく}して

罪福信じ善本を

罪福信じする行者は

仏智の不思議をうたがいて

たのめば辺地にとまるなり

疑城胎宮にとどまれば

三宝にはなれたてまつる

罪福ふかく信じつつ

善本修習するひとは

疑心の善人なるゆえに

方便化土にとまるなり

仏智の不思議を疑惑して

罪福信じ善本を

修して淨土をねがうをば

胎生といふとときたまふ

十五、末灯鈔

行者のおののの自力の信

にては、懈慢辺地の往生、

胎生疑城の淨土まで

ぞ往生せらることにてあるべき」とぞ、うけたまはりたし。乃至

仏恩のふかきことは、

懈慢辺地に往生し、疑城胎宮に往生するだにも、弥陀の御ちかひのなかに、第十九・第二十の願の御あはれみにてこそ、不可思議のたのしみにあふことにて候へ。仏恩のふかきこと、そのきはもなし。

十六、末灯鈔　念佛往生と信する人は、辺地の往生とてきらわれ候ふらんこと、おほかたこころえがたく候ふ。乃至　名号をとなふといふも、他力本願を信ぜらんは辺地に生るべし。本願他力をふかく信ぜんともがらは、なにごとにかは辺地の往生にて候ふべき。

同行よ!!　化土の事は聞かされていないから御承知ないだけだ。雑行雑修自力の心を振り捨てた積りで、素直に他力の名号に向いておれば、皆報土往生のように自惚れていが、危険極まりない信仰だ。

誰も雑行を雑行と知つて雑行を行う者はいない。雑修を雑修と知つて雑修を修する者はい

ない。自力を自力と知つて自力を働く者はいない。疑いを疑いと知つて疑う者はいない。

知らずに行つてゐるのだ。知らずに行つたからとて、その結果は各自が刈り取らなければならぬのだ。

信心頂いて報土往生させて頂こうと思つて参詣する者に、計らいのない人は一人もいない筈だ。計らいつきて親に計らわれていた事に驚いて、捨自帰他した一念の徹底する迄は、皆信前をうろついてゐるのだ。その信前の間に死ねば洩れなく化土往生だ。

しかし化土に往生する人は疑心の善人であつて、我々は悪人だから化土には往生出来ないと言う人があるが、化土に行かれない位の者が、至極の報土往生の出来る筈がない。いや他力で報土に参れるのだ。自力がつきましたか他力に生かされましたか、自分の機を抜きにしてきましたが他力に生かされましたか、自分の機を抜きにして法を死後に眺めているの

は、他力の真似をしている自力であつて、山羊の真似をしている狼だ。

我々は自力の機執が去り難く、一朝一夕で他力の願力に乗托し切らないから、方便の第十九・第二十が建てられたのだが、その境地にいる間の人を疑心の善人と言うのだ。開発していなから疑心、素直に聞いていると自惚れているから善人だ。それが仏の慈悲によつて、第二十願の果遂の願功により化土往生をさせて頂き、三宝を見聞しない罪を懺悔して報土に趣入さして頂くのだ。

この機に用事がないと言えば無帰命安心だ。十劫の昔に助かつていると言えば十劫秘事だ。開発の境地を語る者の悪口を言えば邪見だ。素直に聞いていると自惚れている者は憍慢だ。邪見憍慢の悪衆生が、素直な人間と自惚れて、信後の真似をしているのだから、化土巻に「悲しきかな、垢障の凡愚、無際よりこのかた助正間雜し、定散心雜するがゆえに、出離その期なし。みづから流転輪廻を度るに、微塵劫を超過すれども、仏願力に帰しが

たく、大信海に入りがたし。まことに傷嗟すべし、深く悲歎すべし。乃至 報土に入ることなきなり』

と聖人を慟哭せしむるものは素直に聞いていると自惚れている人達だ。何時になつたら
悪夢から覚める時が来るだろうか。南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏。彼仏今現在成仏 法龍
称念必得往生。

同行よ!! 「真假を知らざるによりて如來廣大の恩徳を迷失する」と仰せられてあるが、

仮を仮と知らない者は真に到達していないので。真を真と知らない者は体験がないからだ。

真假の分際を知らない者は摂取されてはいないので。三世の諸仏が呆れて逃げた本性の照ら
し出される事は容易ではないが、それが開発される事は希有の難事だ。二種深心が徹底して
摂取された一剎那の広大難思の慶心を諦得された者なら、信前信後の水際が鮮やかにつ
く。平生業成、現生不退、明信仏智の体験のない人は、如來廣大の恩徳を迷失しているの

だ。

雜行、

雜修、

自力、

疑心の柵を離れ切らぬ

心の柵を離れ切らぬ

心の柵を離れ切らぬ

心の柵を離れ切らなければ化土の結果は免れ

心の柵を離れ切らなければ化土の結果は免れ

心の柵を離れ切らなければ化土の結果は免れ

ないのだ。